吉水　大谷　眞葛原について

小西存祐

（一）はしがき

宗祖の一代に於ける御遺跡は、宗祖みづからのお詞にもあつた樣に、謂ゆはる諸州に遍滿してゐたわけで、その間別に輕重の區別が有つた譯ではないが、事實その中心となり、亦た今なつてゐるものは、何んといつても現在の知恩院一帶の土地である。

是のあたり昔は大谷と稱し、亦た吉水といへば、極めてルーズに呼ばれてゐた樣であるが、時にまた兩者を區別して用ひられてゐた樣なことも、往々傳記の上に見へてゐる。

例へば勅傳六に、上人一向專修の身となり給ひしかば、つゐに四明の巖洞をいでゝ、西山の廣谷といふところに、居をしめ給き。いくほどなくて、東山吉水のほとりに、しづかなる地ありけるに、かの廣谷のいほりをわたして、うつりすみ給。そのゝち加茂の河原屋、小松殿、勝尾寺、大谷など、その居あらたまるといへども、勸化をこたることなし――といふ樣な一節がある。この文から見ると、吉水の庵室と大谷の禪房とは、勿論同一所では有りゐない譯で、從つて亦た吉水と大谷とは、全然別な處を指したもの、樣にも見へるが、實際はさうでは無かつた樣である。

と云ふは、吉水はもと大谷の別名で、從つてこの兩處は、全然同一の地域を意味したのであるが、その區域內に存在した宗祖の房舍には、御流罪以前のものと御流罪以後のものとが有つて、而かも初めは其等の房舍に、何ら名稱といふ

ものは無かつたのである。併し斯くては、事實不便を感ずることが尠くない所から、一方を且らく「吉水の庵室」と呼んだに對し、他方を夫れと區別して「大谷の禪房」と稱したものと解すべきで有るからである。

とにかく大谷の禪房も、最初はたゞ單に住房であつたのであるが、間もなくこの住房は、宗祖の御往生の處となり、次いでその墳墓の地となつた關係から、爾來大谷は、一般に宗祖の廟堂の地として世間に知られる樣になつて來た。

處が今日大谷といふと、何人もまづ通例親鸞上人の廟所を連想することになつてゐる。是は現在の地名が事實さうなつてゐるから、それが當然な譯であるが、こゝ三百年ほど以前、即ち德川の初期慶長の頃までは、全くさうでは無かつたのである。

それは親鸞上人は、もと宗祖の高弟であつたといふ關係から、沒後その遺骨を宗祖の廟側に葬つたといふことが、眞宗側の記錄（聖人本願繪傳鈔寺通紀）に見へてゐる。宗祖の廟側とは、全體どこのことを云つたのであるか、頗る明瞭でないのであるが、兎も角それは大谷の地であつたと云ふのである。その後十餘年を經て文永九年の冬（宗祖滅後六十一年）、更にその墳墓を大谷から「吉水の北の邊」――即ち今の崇泰院の地に改葬し（繪傳鈔、反故裏書、翼讃等）、そこに廟堂を建てゝ祖像を安置した。是が今日の本願寺の起原である。爾來三百三十餘年間、本願寺はこの崇泰院の地に存續をしてゐたのであるが、慶長八年（宗祖滅後三九二年）知恩院の境域が擴張せらるゝに際し、幕府の命に由つて同廟所は再び鳥邊野に移轉せらるゝことゝなり、依然として舊名を用ひて大谷の墓所と稱してゐた。是が今日の西大谷である。それから東大谷の方は、恰度その前年（慶長七年）東本願寺が分立したので、承和二年その境內にあつた祖廟を移したもので、大分後の事に屬する。

それで吉水てふ名稱は、最初は主として宗祖の開敎の處を稱し、大谷は其の廟所を呼ぶに用ひられたのであるが、後には上述の樣な關係から、大谷の稱は却つて鳥邊野の方に移り、本家の大谷は、却つてまた吉水の名を以つて稱せらるゝに至つた。

（二）吉水の庵室

吉水の稱は、かの清水（きよみづ）が音羽の瀧から其名を得た如く、「水」に因んで名づけられた名稱であることは疑ない。けれどもその水といふに就て異說がある。

一說には、知恩院の山門石壇の西南に「かなとこ石」といふが有つて、そのかみ（正元の頃）、粟田の藤四郎吉光といふ刀鍛冶が、その石で刀を鍛へたと云ふのである。つまり其の邊りに吉い水が涌き出たからなので有らふ（地名辭書）と云ふのであるが、何だか今一つ根據が薄弱な樣である。

乃で一般には、名勝志などの說によつて、圓山安養寺の境內にあつた泉水にその起原を求めてゐる。この水、昔は靑蓮院の座主が灌頂の時に用ひられたと傳ふるもので、吉水の名は、蓋しこゝから來たもので有らふと云ふのである。

安養寺は、南北朝の末から時宗の道場となつて今日に及んでゐるが、この寺昔は天台の別院で、建久年中、慈鎭和尙が止住してゐられたと云ふことである。で世間では、和尙のことを「吉水ノ僧正」と字し（勅傳十五）、又その住房を「吉水の庵」とも稱した（地名辭書）、などいふ說のある所から見れば、名勝志の說は、蓋し不當といへども不遠で有らふと思はれる。

果して然らば、吉水は大谷の別名ではあるが、その主として呼ばれた區域は、この安養寺の周圍であらねばならぬ。宗祖が最初、廣谷から移されたといふ庵（いほり）は、今の知恩院の御影堂の所に在つたと云ふことであるが、それを勅傳（第六）に、「東山吉水のほとりに」と云つてあるは、如何にもよく事實に符合してゐると思はれる。

次に、その吉水の地にあつた宗祖の庵室であるが、宗祖の庵室は、最初はたゞ廣谷から移された房舍——即ち後に「中の房」と稱し又た「二ツ岩の禪房」とも稱されたもの、以外には無かつたのである。

所がこの中の房は、その後弟子らの數（かず）が增加するにつれて、漸次狹隘を感ずるやうになり、次いで「西の舊房」、「東の

新房」と稱する二つの房舍が新たに設けらるゝに至つた。前者は今の山門の西南の處に在つたもので、或はそれを「下の房」と名づけ、亦は「清水ノ禪房」とも稱された。沒後遺誡文（漢語燈錄第十）によると、この下の房は最初長尊といふ弟子の所有に屬したものであつたが、便宜それが宗祖の門弟の宿舍に充てられたものと察せられる。後者は今の鐘樓のわき「螢の岩屋」と稱する附近に在つたもので、或はそれを「上の房」亦は「松下の禪房」とも呼んだ。同じく遺誡文で見るとこの上の房は、本と六條尼公の寄附に係るもので、當時尼公の養子圓親といふものゝ所領であつたと云ふことである。

已上吉水の三房の中、宗祖は東西の二房を以て弟子の宿舍と爲し、御自分は謂はゆる中の房に在つて、七十五歲（建永二年）御流罪の時に至るまで、前後通じて三十二年間をそこで過された。それで宗祖の一代に亘つて、他に暫住兼帶の地も多かつたけれど、多年永住の本處と定められたものは、實にこの吉水の地で、やがてまた大師の「吉水上人」の名を專らにせらるゝ所以である。

それにしても宗祖が、何ふしてこの吉水の地を、斯く本處と定められるに至つたかといふに、この處、蓋し夢定中に現はれた二祖對面の靈跡で、宗祖にとつては、實に忘れることの出來ない想ひ出での土地であつたからなのである（白道の聖者の內二祖對面の項を見よ）

（三）大谷の禪房

吉水が水に因んでその名を得た如く、大谷はまた谷に由つて名づけられた名稱である。その地域は、華頂山と祇園神社の間に在つて、北は粟田の附近から、南は雙林寺の近邊にいたる山麓一帶の高地を斯くいつたのである。この邊り今日は地形が著しく變化をしてゐるが、昔は大きな谷を成してゐたと想像されるので、偖こそ大谷の名も起つてきたも

のと思はれる。榮花物語をはじめ、その他のかなり古い物にも、その名が散見してゐる所から見れば、相當古い地名であつたことが解かる。

處で宗祖の大谷の禪房は、上述の内いづれの處に在つたかといふと、今の勢至堂がその跡だと云ふのである。現在の勢至堂は、享錄三年德譽上人（華頂二十七代）の建立に係るもので、今の知恩院の諸堂中、最古の建築に屬するのであるが、宗祖の御在世には、こゝに南禪院と稱する古い堂舍（慈覺大師創建）が在つて、當時青蓮院の傳領に屬し、護摩堂として永らく使用されてゐたといふことである。處が建曆元年十一月、宗祖か御流罪の勅免を得て歸洛をされて見ると、吉水の諸房は既に荒廢に歸して、到底居住に堪へないこと、成つてゐた。そこで青蓮院の慈鎭和尙は、いたく大師に同情を寄せられ、山上の南禪院を附して（勅傳第三十六）大師の止住に充てられた。是が謂はゆる大谷の禪房である。

かくて大師は、この禪房に止住し給ふこと約二箇月餘りで、翌建曆二年正月、遂に同禪房に於て往生の素懷を遂げられた。そこで弟子らは、東の岸上に廟堂を建てゝ尊骸を葬り奉り、知恩報德の誠を致した。勅傳（第三十八）に、その事を記して――上人の住房のひんがしの岸のうへに、西はれたる勝地あり、ある人これを相傳して、自分の墓所とさだめをきけるを、上人入洛のゝち、去年十二月、かの領主上人に寄進す。券契等おなじく寄進狀にあひそへたてまつりければ、源空にゆづりたまふは、これ三寶に廻向せらるゝなり、佛うけ給へとて、火中になげ入られぬ。然にいま上人往生のとき、この地に廟堂をたて、石の唐櫃をかまへて、おさめをきたてまつると。今の御廟が即ちそれである。

その後、この大谷の禪房は、嘉祿（滅後十六年）の法難をへて文曆（滅後二十三年）の初め、勢觀房の再興を得て華頂山、知恩院、大谷寺と稱し、始めて寺院の形態を採るに至つたが、無論當時の規模は狹小なものであつた。知恩院が知恩院として現今の樣な尨大な地域を有する樣になつたのは、越へて第二十九世滿譽尊照上人の時、即ち德川の慶長以後のことである。

（四）眞葛原

歴史的な宗祖の御舊跡としては、古い所に何ら記載が無い樣であるが、德川時代の傳書（傳法時處考等）を看ると、謂はゆる二祖對面は　この眞葛原で行はれたといふ樣に云つてある。

案ずるに是は、宗祖の夢定中に於ける導師との御對面の背景が、恰かも當時眞葛原と稱してゐた地點に符合してゐた所から起つた推定說で、それ以上別に根據のある說ではないと思はれる。

夫れにしても今日眞葛原といふと、圓山公園の南側に隣接した一帶の空地を指していつてゐる樣であるが、昔は眞葛原は、現今よりもモット廣い區域を意味してゐたのである。

だいたい眞葛原は、もと江州の阪本にあつた地名で、今の滋賀院のある附近一帶の地を稱した古名である。多分その邊り一面に蔓草がはびこつて、野原をなしてゐた所から起つた名稱であらふと思はれる。傳說によると、そのかみ慈鎭和尙の里坊がこゝに在つて、例の宮中で問題を惹起したと傳ふる——我戀は松をしぐれの染めかねて、眞葛が原に風さはぐなり（拾玉集）といふ有名な和歌は、或はその當時の作であつたかも知れない。所がその後和尙は、粟田の靑蓮院の方へ移轉をされることになつたので、時人その住所に就いて、洛東にも眞葛原を立てたと云ふのである（地名辭書）。その地域は、大體今の謂はゆる眞葛原の邊から、圓山公園の一帶をも總稱した樣である。

とにかく眞葛が原は、さうした一種のローマンチックな因緣から、一層文人墨客の注意を曳く所となり、寶永年中（德川中期）、梶女と名づくる歌人、祇園神社の華表の南に茶店をつくり、その女百合と俱に、靑裙をつけて客に茶をすゝめ閑あれば筆を手にして和歌を詠じたと云ふことである。かの池大雅の室玉蘭は、實にこの百合女の子であつたと云ふ。

斯うして眞葛が原は、德川時代の中期に至つていよ／＼浪漫的となり、いよ／＼著名となつて、果ては俗曲（京四季）に迄その名を歌はれる樣になつた所から、遂には二祖對面の場所も、さふした名勝の名をもつて言ひ表はすに至つたものではないかと思はれる。